

テーマ 「仲間とともに認め合い、よりよく生きようとする心を育てる授業づくり」

1. テーマ設定の理由

学習指導要領が告示され、総則に「道徳の時間を要として学校教育全体を通じて行うもの」とあり、学校教育全体で道徳教育を行うことの重要性が明確にされた。これを受け、学校全体で取り組む道徳教育の実質的な充実を図る視点から、本校では昨年までの3年間を「言語活動の充実と道徳教育の推進」に取り組んできた。

サブテーマとして、「中心発問のあり方」「道徳の時間や各教科での授業の工夫」「自己を見つめ、共に認めあえる授業づくり」を設け、全職員が道徳教育に関わることにより子どもたちの心に響く授業を目指してきた。

本校の研究主題は「仲間とともに育む柔軟な思考力」である。これは、自らの考えだけに固執するのではなく、自らの体験・経験を生かして、他者の考えや意見を受け入れる態度を持ちながら、多面的・多角的な視点に立った主体的な思考力を身に付けることであると考えている。『中学校学習指導要領解説 道徳編』（平成20年9月）に「学校における道徳教育においては、各教育活動の特質に応じて、特に道徳性を構成する諸様相である道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度を養うことを求めている。」とある。この中の道徳的判断力について、「それぞれの場面において善悪を判断する能力」であり、「的確な道徳判断力をもつことによって、それぞれの場面において機に応じた道徳的行為が可能になる。」とある。この道徳的判断力は道徳的価値を人間として生きるために大切なことであると理解し、人間としてどう対処することが望まれるかを判断する力である。そこで、道徳的判断力を促す授業づくりをしていくことで、道徳性を養うことに結びつき、本校の研究主題である自らの考えに固執するのではなく他者の考えや意見を受け入れ多面的・多角的に思考する力、つまり柔軟な思考力へとつながるのではないかと考える。

また、過去3年間の研究の成果を踏まえ、さらに道徳の授業を充実したものにする必要がある。よって、本年度は生徒が道徳的判断力をもち道徳的価値の自覚を深め、道徳的实践力を育成する授業づくりを目指していきたい。また、生徒が仲間の存在を大切に、認めあえる雰囲気の中で人間としてよりよい生き方を模索しようとする手助けができるような道徳授業の実践を目指していくこととした。

2. 本年度の研究について

(1) 3年間の研究の成果と課題

①成果

- ・ 中心発問のあり方・道徳の全体計画や関連表を全職員で見直すことで、教師間の道徳授業について意見交流を図る場が増えた。
- ・ 発問の構成を意識する事により、登場人物の心情に迫る授業の組み立てができてきた。
- ・ 担任だけでなく、所属職員も道徳授業を担当する輪番制を取り入れたことにより、職員全員が子どもに寄り添い、また、いろいろな情報を共有し、授業に生かすという意識が高まった。
- ・ 教師が一つの授業方法に固執せず、様々な取り組みを検討し有効な方法を実践することを心がけることで技量が高まってきたと感じられた。

②課題

- ・ 輪番制のために、クラス事情を掴めずに授業を実施してしまった。
- ・ 学年をこえて道徳教育についての協議会を定期的に持てなかった。
- ・ 各教科と道徳の時間、ならびに特別活動、総合的な学習など年間を通して関連を考えたとき、まだまだ見直す必要がある部分が多かった。

(2) 本年度の研究計画

①副教材の購入

全学年あかつき出版の副教材を個人持ちで購入している。

今後、学年ごとに別会社の副教材・文部科学省が出している道徳教材も購入して、教材の精選をしていく。

②授業研究の実施

中研を道徳で行う。全職員同じ立場から研修をし、情報交換を行うようにする。

③授業形態の研究

関心をもって考えさせる導入、協同学習を取り入れた話し合い、感動を共有できる終末の工夫を考え、その評価をする。

④教材の蓄積

先生方から実践を集め、閲覧できるように紙ベースでファイリングしていくとともに、校内LANにおける共有ホルダーにもデータを保存していく。

⑤各教科と道徳教育との観点の確認

各教科で道徳教育の観点を考え、授業および年間計画を見直し、道徳教育との関連を図っていく。

⑥学年中心の道徳教育の計画づくり

学年会で教材研究する時間の確保をする。

学年で道徳について話し合う機会を増やすことで、縦割り行事を活かした学級・学年の取り組みも円滑に行えるというメリットがある。

道徳の授業においては、資料の読解に終わらないように、資料を通して道徳的判断力を促すとともに、自分を見つめ直せるものとなるように授業の組み立てを工夫していく必要がある。

以下の授業の組み立て方表（読み物資料を使用した場合）は2009年度の研究に向けての現職教育で畿央大学教授 島 恒生先生にご指導いただいたものである。

導 入	ねらいとする主題への方向付け。(向く) ・ねらいにかかわる話題や場面を手がかりに問題意識を引き出す。 ・資料の補説や雰囲気づくりに使うこともある。	
展 開	前 段	資料の世界に入り込み、ねらいとする道徳的問題を追求し合う。(つかむ) ・中心発問…いわゆる中心となる場面の発問で、児童生徒の多様な感じ方や考え方を反映させる。 ・基本発問…中心発問の問題追求を一層効果的にするために、その前後に投げかける。 ・補助発問…児童生徒の意見をより明確にしたり、深めたりするための言葉掛け。
	後 段	自分自身の問題としてとらえ直す。(見つめる) ・資料での話し合いを各自の生き方に反映させ、生活経験の話し合いなどを通して自覚を深めることができるようにする。
終 末	ねらいとする道徳的問題のまとめ。(あたためる) ・余韻を残したり、印象に残る端的なまとめをしたりする。	

以上、昨年までの研究を踏まえ、課題を検討し直し、学校全体で道徳教育を実践し、道徳性を養わせていくことで「仲間とともに認め合い、よりよく生きようとする心を育てる授業づくり」を目指していきたい。また、話し合いができ、互いに認め合える道徳の授業づくりが成されていくことで、本校本年度の研究テーマ「仲間とともに育む柔軟な思考力」を身につけるための土台である温かい雰囲気や他者を受け入れることのできる学級づくりを目指していきたい。

3. 成果と課題

昨年までの3年間の研究の成果を活かしながら、充実した道徳授業づくりに向けて今年度も全職員で取り組んできた。また、本校の研究テーマでもある「仲間とともに育む柔軟な思考力」を身につけさせていく過程で必要な他者の意見を受け入れ、多面的・多角的に思考する力を育てる授業づくりを目指し、研究に取り組んできた。つまり、道徳的判断力を持ち、道徳的価値の自覚を深め、道徳的实践力を育成する授業づくりを目指したのである。しかし、全ての授業かつ内容項目で善悪を判断する能力（道徳的判断力）を身につけられたかというところではない。道徳的心情を養うことに重点をおいた授業もあれば、道徳的实践意欲を沸かしたさせる授業もあるのが事実である。年度始めに教科との関連表や学年ごとの年間計画を作成したが、どの内容項目で道徳的判断力を身につけさせていくのかといった計画を立てることができず、年間計画をもとに授業を進めていったのが現状であった。しかし、昨年までの成果を踏まえて、引き続き各学年の中研で道徳の研究授業を実施していくことにより、職員間で道徳についての研修を積み、情報交換する機会が多くなった。また、輪番制を続けたことによってでも道徳についての情報交換ばかりでなく、生徒についての情報をも共有することができた。これらのことにより、研究テーマをしっかりと身につけさせるための緻密な計画づくりは為し得なかったかもしれないが、生徒に道徳性を養わせ、温かい雰囲気では他者を受け入れられることのできる授業づくり・クラスの雰囲気づくりに向けて前進したのではないだろうか。これは、研究テーマである「仲間とともに育む柔軟な思考力」の土台をしっかりと築いたといえるのではないか。しかし、輪番制のために、1年間を通してどのような道徳的価値をもった生徒に育てたいのかといった生徒像が見極められないのではないのかといった意見があるのも否めない。だが、学年間にとどまらず全職員間において研修を重ねていくことで、全職員が学年を超えて生徒の理解を深めていくことにつながり、より大きな成果が得られるであろう。今後は、年度初めに全職員でどのような授業でどんな能力を付けさせていくのかを計画しながら、生徒がよりよい生き方を模索しようとする手助けができるように、過去3年間で積み重ねた職員の知識をさらに深め高めていけるような取り組みを続けなければならない。

《参考文献》

「中学校学習指導要領解説 道徳編 平成20年9月」文部科学省

1. 主題名

「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ」《内容項目2 - (5)》

2. 資料名 「ノンマルトからの使者」(ウルトラセブン42話)

3. 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

自分が知らないモノ・・・物であったり、人であったり、考え方であったり、価値観であったり、その形態は様々であるが・・・それと出会ったとき、大人でさえ自分の経験でしか対応できないことが多い。仕方がないと言ってしまうそれまでだが、少なくとも相手の言い分を聞き、可能な限り寄り添うことは必要ではないか？相手が敵対している、あるいは、少なくとも自分に対して好意を持っていないと感じたとして、その理由が自分の無意識の行動や無知によるものではないと誰も断言はできない。

近年問題視されている「イジメ」問題にも、相手の個性や立場を理解できないことや自分とは違う考えや生き方を受け止めることができないという点で影響を与えているのではと考えた。

社会生活を営む上で、他者との関わりは必要不可欠である。「みんな違って、いい」ということを知識としては理解している。しかし、その違いをしっかりと受け止められるだけの心の成長ができていないのかという疑問だ。個性を尊重するだけでなく、それを寛容な心で受け止められるかが一番の重要なところではないかと考えた。

(2) 生徒について

中学三年生ともなると、様々な面で成長するとともに悩みや揺らぎが行動や態度にでる生徒が非常に多い。本クラス3-Bには、そのタイプの生徒が顕在的・潜在的に多数在籍している。「してはいけない」と知りながら「してしまう」生徒。「相手の言いたいことは理解できている」のだが、どうしても「自分の中の何かが」邪魔をして理解できない生徒。「私には理解できないことをしている生徒」がいるけど、「私には迷惑がかからないなら、それでいいや」とある意味冷めている生徒。などがある。

生徒の多くは、自分を理解して欲しいという欲求に満ち溢れている。あるいは、自分を理解してもらいことなど諦めているのかもしれない。だが、人と関わりを持たない社会生活はありえない。互いに理解し合うことが、社会生活の大きな土台ではないか。しかし、理解し合うために他者を変えることなどなかなか外部からの刺激だけでは容易でない。結果として、自分自身が変わることで他者への自分の見方を変えることができ、そうした結果の先にしか、他者が変わることはないのだ。

これから先の人生を歩む上で、自分自身が他者を理解しようとするのと、他者の考えや意見などを受け止められるような生徒になって欲しいと考えた。

(3) 資料について

常に意識していることが、生々しくなりすぎないことである。生徒は、正しい道徳観を知識としては持っている。生々しい資料は、「ああ、こう答えろと先生は言っているのだな」と道徳的な正解を生徒が頭で答えてしまうからだ。

教材として選んだウルトラセブン42話は、「正義とは何か」「理解し合うとは何か」「人間の身勝手さ」など様々な意見や視点が述べられている作品である。子供向け特撮番組であり、生々しさは当然薄れる。キャラクターが出来ているので、自分自身の感情を素直にキャラクターに転じることができる。そういう点で、子供向けの番組は上手く扱えば絶好の道徳教材となりうる。もちろん、全ての作品でそうであるわけではない。また、こういった教材ばかりでは、生徒はただ楽しいという気持ちだけに支配されてしまう

可能性もある。その危険性を視野に入れながら、今回教材化に挑戦した。

今回は「互いを理解し合い尊重し合うために、相手から学ぼうとする寛容の心」に「超越的な存在」であるウルトラセブン、「私たち人間の代表」である地球防衛軍《特に隊長》、「理解してもらえない存在」であるノンマルトの視点で迫らせたい。

ビデオ教材であるため中心部分が分かりにくいと考えられるので、補助的に簡単なノベライズを添えた。

4. 本時の目標

互いを理解し合い尊重し合うために、相手から学ぼうとする寛容の心に気づかせる。

5. 本時の展開

	学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	判断や行動に困った事がないか、理解できなくて困った事はないかと問いかける。 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・あるある。 ・友達が何を考えているか分からない。 ・大人が何を考えているか分からない。 	できるだけ、自分勝手な意見を出させる。
展開	ビデオ教材のあらすじを読む。 3分程度のものそれぞれのタイミングで読む。	キリヤマ隊長、アンヌ隊員、真市の三人の気持ちをそれぞれの場面で考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ●ホワイトボードにノンマルトの説明と登場人物名を書く。 ●あらすじを話す。
	女性隊員（アンヌ）との場面 10分	※真市くんが地上の人にメッセージを送ったのは、どんな気持ちからだろう。 ノンマルトと戦って欲しくない。 海底を荒らして欲しくない。 人間は知らないうちに侵略をしてるんだよと伝えたかった。 ノンマルトが可哀相だから。 ※わたしは人間なんだから人間の味方よ。真市君もそんなこと言うべきじゃないわという言葉がアンヌ隊員はどんな気持ちでいったのだろう？ 冗談だと思っていた。 ノンマルトにだまされてはいけないから。 ノンマルトではなくて人間の心配をしてほしいから。 人間が侵略者だなんて信じられないから。	<ul style="list-style-type: none"> ・どの場面にも、互いを理解するチャンスはあったのに、自分の思い込みで相手を思いやれないことで最悪の結末に向かっていることに注目させる。 ・キャラクターに委託していると気づかせないことで、自分自身の持っている道徳性を補充し、他の生徒の考えを聞くことで深化・統合できるようにする。
	ノンマルト海底都市破壊後の隊長のセリフの場面 22：30あたり 10分	※ウルトラ警備隊全員に告ぐ！ノンマルトの海底基地は完全に粉砕した。我々の勝利だ！海底も我々のものだというセリフについて…言ったキリヤマ隊長、それを聞いたとしたら真市くんはどんな気持ちだっただろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・本当にこれでよかったのか。 ・なぜ言うことをきいてくれない。 ・人間が一番だ。 ・ノンマルトも地球の生き物なのに助けてくれないの？ ・なにかほかの手は・・・。 	

		<ul style="list-style-type: none"> ・地上人は酷すぎる。 ・危険なモノを破壊したぜ。 ・やっぱり人間は信用できない。 	
	「寛容する心」について考える。 15分	<p>◎キリヤマ隊長の言葉を聞いた時、アンヌ隊員はどんな気持ちだったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここまでしなければならなかったのか。 ・これでいいのか。 ・これからどうすればいいのか。 ・他の方法があったのではないか。 ・早くこの場を去りたい。 ・人間より先に地球にいたことを認めてもいいのでは。 	◎が中心発問 ※最初の場面でのアンヌ隊員の気持ちとの変化もとらえさせる。
終末へと	アンヌ隊員の心の変化について考える。	※アンヌ隊員の心の変化を示し、どんな気持ちがわき出ているのかを考えさせる。	・相手を理解しようとする心に気づかせる。

6. 結果と考察

結果と考察というよりも、反省ばかりになってしまうが・・・自分の中で一番の大きな目標であったのは、ビデオ教材をいかに道徳の中に取り入れるかということだった。

道徳でビデオ教材を使うときに、「焦点化したい場面」を示しにくいということを注意されたことがある。だが、ビデオという流れの中でこの場面と示すのはなかなか難しい。ビデオとしての流れを切らずに、いかに道徳的なことを感じさせて考えさせるかを工夫した。今回の工夫としては、大まかなあらすじを文章化して提示することで重要なシーンだけをビデオとして

みせるというものだ。本編をあらすじとして文章化するのにもっとも苦労した。それは、こちらの意図する道徳的な価値があからさまに見えるものにはできないが、まったく意図のない文章も道徳の授業として意味がないと考えたからだ。

文章が答えを決定しているものではないように仕上げたつもりだった。

また、主題設定の(3)にも書いたが、回答として非常に道徳的なものを感じる力を生徒は持っている。言い方を変えれば、教師の求める道徳観・・・ある種の正解を簡単に答えるのだ。それは、ある意味ですごく恐ろしいことであると私は思っている。人の心は数式や論理だけでははかれない部分がある。だからこそ、道徳的なものを問うていると明確に分かる道徳の授業でありながら、扱っている教材が道徳的なものを感じさせないようなものを選んできている。

今回の教材「ノンマルトからの使者」もそうだ。

ウルトラセブンという子供向け特撮番組・・・今の生徒は多チャンネル時代やレンタルビデオ(DVD)の影響で知っている生徒もいるが・・・多くの生徒は知らないし、知っていてもピンとは来ない。「ああ、今日はウルトラマンを見る道徳かあ・・・楽しいなあ・・・」ぐらいの感想ではないか。だが、それでいい。いや、それだからいいのだと思っている。

そんな中だからこそ、生徒の本当の部分が見えるのではないかというのが狙いでもある。

あらすじを含めたワークシート1の問い「アンヌ隊員の『わたしは人間なんだから人間の味方よ。真市



君もそんなこと言うべきじゃないわ』について授業をしたクラスの生徒のほぼ全員がアンヌ隊員に共感している。それは、人以外のものを除外する気持ちだ。

- ・海底が欲しいから
- ・真市はだまされている
- ・真市くんを助きたい
- ・人間が侵略者だなんてありえない

特に「海底が欲しいから」は非常に多くの生徒が感じていた。その状態から、ワークシート2に入っていく。戦闘シーンを少しだけ挟みながら、真市君とウルトラセブンことダン隊員とのやり取りをビデオで見せる。真市君の言葉に説得力が出てくるあたりだ。その後、キリヤマ隊長の瞬間的な悩みのあと、ノンマルトを攻撃するシーンと破壊される海底都市を見て歓喜するキリヤマ隊長のセリフが続く。「ウルトラ警備隊に告ぐ！ノンマルトの海底基地は完全に粉碎した。我々の勝利だ！海底も我々のものだ！」というセリフだ。この時のセリフとアンヌ隊員の表情から決してそれほど喜ばしいものでないことは感じ取れる。現に多くの生徒は、アンヌが悩んでいることには気づいている。

さて、ここで中心発問である人間の代表であるキリヤマ隊長の言葉を聞いたアンヌ隊員の気持ちを考えることだ。劇中では、アンヌ隊員はセリフを発しない。ただ、ある表情を浮かべているだけだ。この部分を文章化するときには「呆然とする」とするにとどめた。少なくとも前半は、人間側にいたアンヌ隊員がノンマルト側に感情移入したことが分かる重要な部分だが、それを文章で示すのは避けた。

- ・複雑な気持ち《この選択はあったのか》
- ・やりすぎだ
- ・すっきりしない

特に「これでいいのか」というものは非常に多かった。

この中心発問に対してもう一度揺さぶりをかけているのが次の「アンヌ隊員の気持ちが変わったのは、どんなことに気づき始めているからだろう？」という発問だ。

実際にウルトラセブンにそのような意図があったのかどうかはわからない。しかし、少なくともアンヌ隊員の変容の理由は番組中では非常にわかりにくい。だからこそ、このアンヌ隊員の変容についての生徒の意見には「異質なものと出会った時にどうするか」という生徒各自の道徳観が現れているだろう。

- ・自分たちが正しいと思っていたけど、ほんまは自分らがまちがっているんちゃうかって気づきかけている。
- ・地球は人間だけのものじゃない
- ・真市君の言っていることはあっている
- ・自分中心に考えすぎている

本当は自分たちが間違っているのでは…というものは、とても多かった。

また、後日別の授業の中で「どうすれば良かったと思う」と聞くと「ちゃんと真市君の話を聞くべき

だった」や「ノンマルトと連絡を真市君に取ってもらえばよかった」と言った答えが聞かれた。嬉しいことに少数だが、ノンマルトとどうすればよかったのかを話し合っている生徒の姿も見受けられた。もちろん、中には「アンヌ隊員の気持ちはわかるけど、やっぱり（ノンマルトは）気持ち悪いから嫌だ」というような生徒もいた。

異質なものと出会い、それを理解することの難しさを知った上で、どうすればいいのかと考えるきっかけにはなっていると強く感じられた。

しかし、道徳として『いろいろなものの見方や考え方がること』を理解することはうまく感じ



させられたかと思うが、『それぞれの個性や立場を尊重すること』は何人かの生徒は感じていただろうが、『寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ』にいたっては感じさせることができなかった。モノの多様性や立場の違いを尊重するような心を感じさせるだけでは道徳とは言い難い。それらを寛容して、謙虚に学ぶ心を感じさせるようなものにしなければならない。

個人的な趣味もあり、外したくない場面に固執しすぎたところもあったのが、一番のミスである。

生徒に生々しさを与えない工夫をしようとしすぎて、自分の生々しい感情が指導案から離せなかった。最後の発問にもっと時間をかけるような展開を考えないといけないとつくづく反省した。

だが、ビデオ教材を道徳に取り入れるという点では様々な学習ができた。まだまだ、改善の余地は当然あるが、これからビデオ教材を使おうという小さな道しるべにはなったと感じている。

こうして、振り返ると出来ないことやしたことがないことへの挑戦は、本当に勉強になる。当たり前のことだが、今回は特につよく感じた。そして、自分自身が挑戦するという気持ちで取り組んだ授業ほど、生徒の心を動かすものはないのだと改めて感じた。

ノンマルトからの使者…1

海底—それは、我々人類の第二の故郷である。そこには、豊かな地下資源と食糧が無限に隠されている。人類は、今、宇宙開発と共に、海底の開拓を着々と進めている。やがて、理想的な海底都市や海底牧場が生まれ、地上よりもすばらしい世界が出来上がるだろう。

ある入り江に海底開発基地センターの船上基地になっている“シーホース号”が停泊している。

シーホース号の姿が見える海岸で、休暇中のウルトラ警備隊の女性隊員アンヌに声をかける謎の少年。

「お姉ちゃん、ウルトラ警備隊の隊員だろう」

砂風呂で眠っていたアンヌはけだるそうに少年を見る。

「だったら、あれ、やめさせた方がいいぜ。ウルトラ警備隊が注意したら、きっときいてくれると思うんだ。僕、もうずいぶん前から、やめろ、やめろって言ったんだけど、ちっとも聞いてくれないんだよ」
ゆったりと体を起こすアンヌ…子どものいたずらだと思っているようだ。

「うるさいわねえ。あれ、あれって、何によ」

「あれだよ」と指さす。沖にシーホース号がみえる。

「あれがどうかしたの？」

「困るんだよ。すぐやめないと大変なことになるよ」ダンが海から上がってくる。

「ね、頼んだぜ、ホントだよ」

逃げるように走りさる子どもをアンヌは立ちあがって見送る。

同じく休暇中のダン隊員に少年の話をする。少年の話をいぶかしく感じていた直後…沖のシーホース号が、突然轟音と共に爆発炎上する。さらに、防衛軍宛の「海底はノンマルトのモノだ。人間が海底を侵略するなら、ノンマルトは戦うよ。」という少年からのメッセージ。半年前に行方不明になった最新鋭攻撃潜水艦グローリア号との関連…。

少年を探すアンヌとダンだが、地域の漁村や学校には姿が見えない。途方に暮れる二人…。車を走らせる中、ダンことウルトラセブンは、『僕の故郷M78星雲では、地球人のことをノンマルトと呼んでいる。ノンマルトは人間のことである。それはどういう意味だろうか。人間でないノンマルトがいると言うのか?』と悩む。それは、海底にいるノンマルトこそが本当の地球人なのではないのだろうかという疑問からくるものだ。もしかすると、現在の地球人こそが侵略者ではないのだろうか?と考える…そんなバカなことはないと自分に言い聞かせるダン。

その時、アンヌの声がダンを現実に戻した。

「ストップ!」

少年だ…。

ビデオ…1「わたしは人間なんだから人間の味方よ。真市君もそんなこと言うべきじゃないわ！」

※ 真市くんが、こんな話を地上人にしたのはどんな気持ちからだろう？

※ アンヌ隊員は、どんな気持ちでこの言葉を言ったのだろう。

ノンマルトからの使者…2

奇怪な巨大生物が現れ、周辺を探索する大学の海洋調査船を攻撃している。轟音を立てて、沈んでいく調査船。

謎の巨大生物を倒し、安寧とするウルトラ警備隊…だが、アンヌとダンも積然としない。何かが二人の心にひっかかるものを残している。謎の少年から「あれはノンマルトではない。」とのメッセージが舞い込む。さらなる攻撃をほのめかす少年をとらえるべく、急行する防衛軍の兵士たち。だが、少年を追い詰めると奇怪な姿をした生物…ノンマルトに攻撃を受けて次々と倒れていく。

やがて、あらわれる行方不明となっていた潜水艦…グローリア号による攻撃が始まる。さらに巨大生物も現れて攻撃に加わる。出動したウルトラ警備隊の戦闘機ウルトラホーク一号も撃墜されてしまう。

ダンも危機を察し、ウルトラセブンへと変身しようとする。

そこに現れる少年。

「ノンマルトは悪くない！人間がいけないんだ！ノンマルトは人間より強くないんだ！攻撃をやめて！」

ダンも別の岩陰に走り、変身しようとするが、目の前にまた真市が立っている。

「早くとめて！ノンマルトがやられちゃうよ！ノンマルトが可哀そうだ！やめて！やめて！」

ダンも別のところへ移動するが…少年は、ダンを哀しげに見つめて立っている。

「ウルトラ警備隊のバカ！！」

目に涙を浮かべて、ダンをみる真市。

「真市君！僕は闘わなければいけないんだ」

ついに変身するダン。

巨大生物を追い詰めるウルトラセブン。

一方、ウルトラ警備隊の潜水艦ハイドラランジャーは、ノンマルトの乗る潜水艦グローリア号を追跡する。ハイドラランジャーの発射した魚雷が、グローリア号を一撃で破壊する。残骸が沈んでいく中、隊員が海底に壮大な海底都市を発見する。海草や貝殻が都市の表面をびっしりと覆っている。長い年月をかけて、周りの岩石と融け合ってしまった。

「ノンマルトの海底都市だ。」

息をのむ警備隊の隊長キリヤマやアンヌ隊員…あまりの壮さに圧倒されながらも、脳裏に様々なことが交錯する。

【もし、宇宙人の侵略基地だとしたら、ほうっておくわけにはいかん…しかし、あのメッセージのように我々人間より先に地球人がいたなんて……そんな莫迦なことが……やっぱり攻撃だ】

攻撃を決意したキリヤマ隊長の命令が下る…。とまどうアンヌ隊員。

次々と発射される魚雷が、海底都市を粉砕していく。崩れいく都市を見つめ、呆然とするアンヌ隊員…。

ビデオ2

・・・「ウルトラ警備隊全員に告ぐ！ノンマルトの海底基地は完全に粉砕した。我々の勝利だ！海底も我々のものだ！」

※ キリヤマ隊長は、どんな気持ちでこの言葉を言ったのだろう。

※ この言葉を聞いた時、真市くんはどんな気持ちになるだろう。

◎ この言葉をアンヌ隊員はどんな気持ちで聞いていただろう。

☆ アンヌ隊員の気持ちが変わったのは、どんなことに気づきかけているからだろう？

